

当院における救急部独立後の救急患者の実態調査

The survey of the emergency patients after the independence of Emergency Department.

救急部：飯ヶ濱実・武田真佐子・中村歩子 小野明子・井口靖子・片岡秀樹

《要旨》

平成14年度から平成16年度までの当院の初療室（ER）使用患者に関するデータを、6月ごとに検討し、独立後の救急部の現状と問題点を明らかにした。

初療室使用患者は半期ごとに増加しており9時～21時は来院患者が一定して多かった。初療室使用患者を転帰別にみると、入院は50%その内訳としてHCU28% ICU5%、一般病棟へは救急部の後方ベッドのある東西2階 西8階（循環器疾患）、西7階（神経内科）が多かった。

《キーワード》

救急部の独立 大学病院 救急患者

1. はじめに

当院の救急部は集中治療部に併設されていたが、平成15年4月に高度救命救急センターを目指して独立し一年半余りが経過としている。救急患者に関する平成14年度からの2年半のデータ¹⁾²⁾を振り返り、救急部来院患者の実態を調査したのでここに報告する。

救急部の概要と看護体制

- HCU：4床 HCU：1床 初療室（ER）：1室 手術室：1室
- 看護師長 1名 看護師 14名
- 変則2交替制
- 日勤 8：00～16：30 3～4名
- ロング日勤 8：00～20：30 2名
- 夜勤 20：00～8：30 2名
- 遅出（週3回） 11：30～20：00 1名

2. 研究目的

当院における救急患者の実態を分析し、救急部の現状と問題を明らかにする。なお、患者データ¹⁾²⁾は数値化し患者を特定できないよう倫理的配慮をした。

3. 研究方法

A：平成14年度から平成16年9月までの当院における初療室使用患者に関する、

A-1 救急患者数 救急車搬入数

A-2 重傷度別

を6ヵ月毎に集計し比較検討した。

B：平成16年度の4月～9月（上半期）の救急部来院患者に関する、

B-1 時間帯別来院患者数

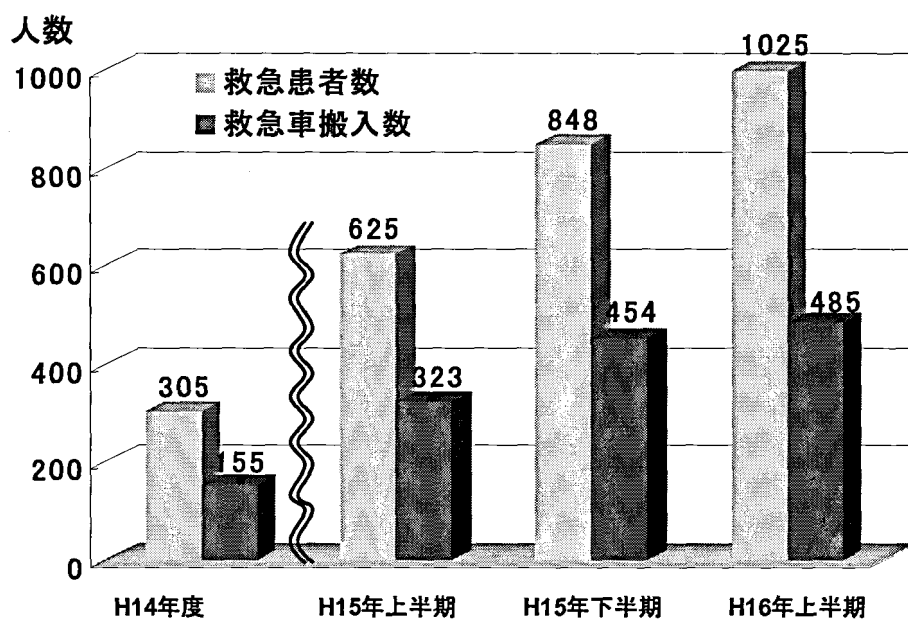
B-2 転帰別患者数

を調査し比較検討した。

4. 結果および考察

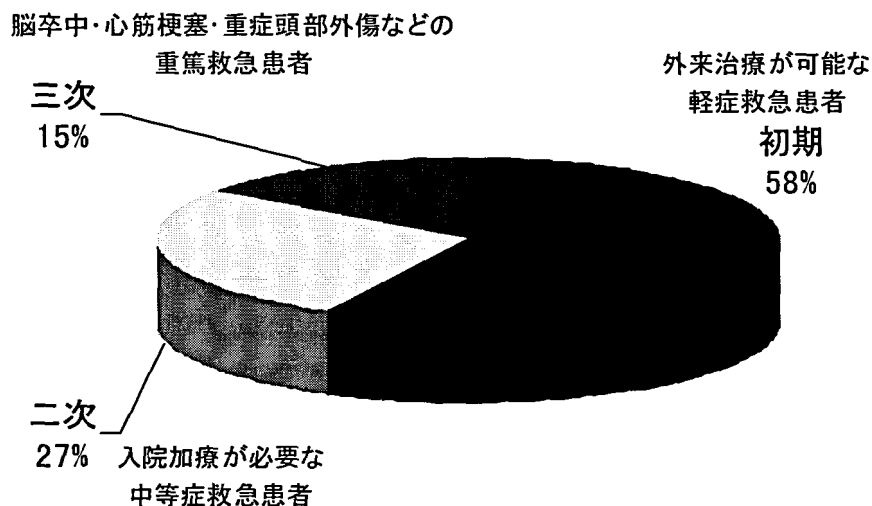
<救急部来院患者について>

結果A-1より、平成15年度の救急部における来院患者数は（平成15年上半期：625+下半期：848＝）1473名であり前年度より4.8倍、救急車搬入数については（平成15年上半期：323+下半期：454＝）777件で前年度より5.0倍に増加した。平成16年度上半期においてH15年度下半期と比較すると救急車数はほぼ変化がないが、救急車以外での来院患者数は1.2倍となっていた。（グラフ1）



グラフ1. 救急部における来院患者数

結果A-2より、救急部は三次救急施設として重症救急患者の受け入れをしているが、平成15年度からの統計によると初期患者が全体の58%を占め、二次27%三次においては15%という結果であった。(グラフ2)

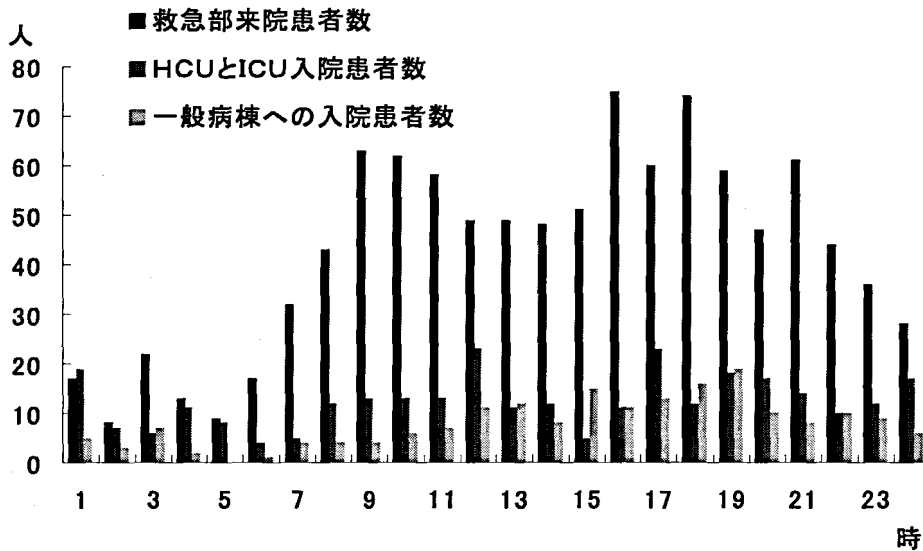


グラフ2. 救急部独立後の重症度別割合
(H15年4月～H16年9月) N=2498

平成16年度上半期での来院患者数は、9:00～21:00台の間がほぼ一定して多く、その後は減少し2時台が8名で最小であった。そのため日勤後の看護力の低下が明らかとなり看護加算範囲内にて11時30分～20時までの遅出勤務を設け救急患者に対応している。しかし勤務体制上、週3日以上組み入れることができないことが現在の問題である。(グラフ3)

<転棟について>

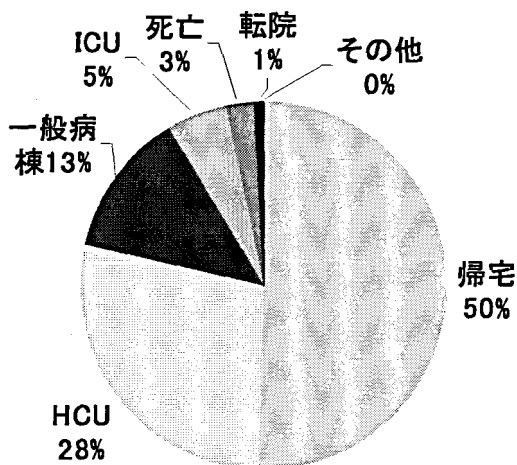
結果B-1より、平成16年度上半期において、受診当日の救急部から一般病棟への入室時間では10時頃より多くなり19時台が19人だが、20時より病棟への入院数は減少し5時台が0名であり、深夜・早朝では少ない傾向である。これに対し、ICU・HCUへの入院患者数をみると来院患者数に対して平均的に入院が多く、また夜間は帰宅することは少なくICU・HCUへ入院になる割合が高くなっていた。(グラフ3)



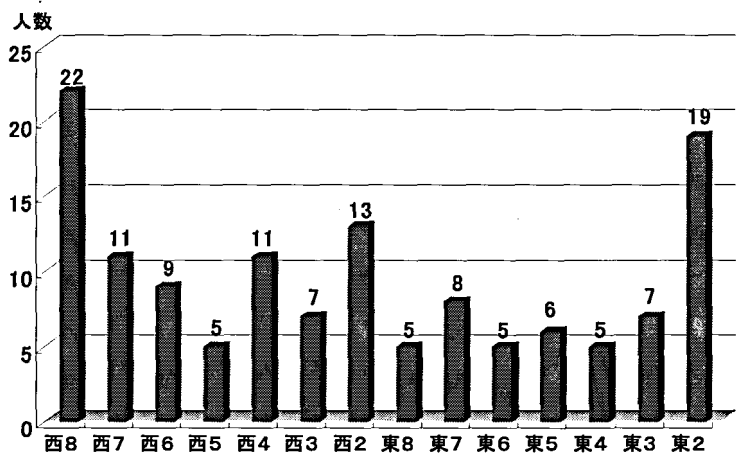
グラフ3. 時間帯別の患者数について
(H16年上半期) N=1025

日中に一般病棟への転科転棟が多い理由として、原則として救急部から夜間に病棟へ直接入院を避けるためにも、HCU 内の入院のベッドを日中に確保する必要があること、夜勤者2名にて HCU 4床・初療室を対応せねばならないことの2点が挙げられる。よって日中では軽症者は当該科である一般病棟へ直接入院する傾向が分かった。

結果B-2 より、初療室から直接入院する一般病棟別の統計では、多いほうから循環器病棟である西8階が22名・救急部ベッドのある東2階19名・西2階13名、産婦人科病棟である西4階11名、神経内科病棟の西7階11名という結果であった。救急部の後方ベッドがある東2・西2への入院が多く、循環器・産婦人科・神経内科の診療科への入院が多いのも特徴であることが明らかになった。このことは救急部に一泊入院し翌日に転科転棟の流れではないため、病棟の業務を圧迫しているかもしれない。(グラフ4. 5)



グラフ4. 初療後の転帰 (H16年上半期)
N=1025



グラフ5. 初療後の直接入院患者数
(H16年上半期) N=133

5. まとめ

結果A-1より初療室使用患者は、半年毎に増加し示していた。また、結果A-2より初期・二次救急患者の受け例が多く増加の要因として考えられる。

結果B-1より9時から21時台は来院患者が一定して多く、深夜帯に来院した患者の入院する割合が高いことが分かった。結果B-2では初療室使用患者を転帰別に見ると、入院は50%であり、その内訳はHCU 28% ICU 5% 一般病棟への入院は13%であった。病棟別で比較すると西8階 東2階 西2階 西4階 西7階への入院数が多いことが明らかになった。

6. おわりに

高度救急救命センターの開設に向け、病床数の増床・スタッフ数の増員が予定されている。これに伴い看護業務・患者の流れが変わることが予測されるが、今回の研究が今後の看護体制の見直し、各診療科・病棟との連携への足がかりとして現在の問題を改善していければと考えている。

引用文献

- 1) 信州大学附属病院 救急部 初療室使用記録台帳 平成15年4月～平成16年3月
- 2) 信州大学附属病院 救急部 初療室使用記録台帳 平成16年4月～平成16年9月